

紙つづて

科学と社会のかかわりは宿命だ。

かつてガリレオ、ニュートン、アインシュタインらの近代科学の巨人たちは、自らの好奇心に導かれて新たな知の地平を開いた。科学は精神高揚の営みだった。時を経て、技術を伴いながら、産業経済をはじめ社会のあらゆる分野に格段に大きな影響を及ぼすに至っている。

一九九九年、ブダペストの世界科学会議は「知識、平和、開発のための科学」に加えて、「社会における科学、社会のための科学」の重要性を宣言した。これを目指して、毎年十月初旬、京都に世界から科学技術界の指導者たちが集結する。各国における科学研究への公的資金の積極投入の主たる根拠はこ

野依 良治

科学の価値の変遷

の時代背景にある。

あれからすでに十三年。残念ながら、わが国の科学界の価値観はあまりにも旧態依然で、社会の要請と大きく乖離していることに懸念を持っている。国公立大学や公的研究機関はいま一度、自らの役割を確認した上で、社会と再契約すべきである。ピーター・ドラッカーの言葉「自らの利益が公共の利益と合致したとき、はじめて正統な存在となる」を銘記してほしい。

日本の優秀な研究者の多くは、幼き日からの入学試験競争の勝者だ。国内仕様の高学歴と公的資金に守られて、研究にこそしむ。本来、科学の深化や技術の進歩に献身すべきだが、むしろ自己中心的、論文発表による評価獲得が目的化している。さらに現実社会の課題解決にはほとんど無関心だ。

(理化学研究所理事長)